



TITLE:

# サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

久保田, 競; 登倉, 尋実; 松林, 清明

---

CITATION:

久保田, 競 ...[et al]. サル類保健飼育管理施設(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1973, 2: 11-13

ISSUE DATE:

1973-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162464>

RIGHT:

この値は、昭和44年幸島で行なったテレメトリによる結果とはほぼ一致する。

なお採食する食物の種類とくに昆虫食について調べ、一日の採食リズムについてもいい成果を得た。(延調査日数71日、研究補助員3名延24日)

## 2. 幸島の群れの遊牧生活。

木村光伸(京大・農・林学)。

幸島の植生を把握し、植生の季節変化、食物の変化と関連して群れの遊牧生活を明らかにしようとした。また餌を投与した場合の遊牧生活のあり方を観察した。遊牧のコース、リズムは季節によって異なるが、概して食物に関係していると考えてよい。例えば5月や11月は食物量が多く、散在しているのでサルは何処でも採食できるから食物は遊牧コースの決定要因にならないが、夏や冬は食物による影響が大きい。餌の投与の影響は中心部に大きく作用し、連続給餌の投与は遊牧生活を大きく変化させられると思われる。

## サル類保健飼育管理施設

久保田競(兼)

登倉尋実

松林清明

昨年度の年報では昭和43年度より昭和45年度の間のサル施設の紹介をおこなった。今回は昭和46年度の動きを紹介する。

第1表は昭和46年度のサルの移動報告を示す。この表で注目されることは、結核で殺処分したアカゲザルが21頭の多数にのぼったことである。これらのサルの大部分は検疫期間中の検査では陰性で、検疫終了1カ月後たまたま斃死したサルの剖検により典型的な粟粒結核が岐阜大学の井上博士により発見され、残りのサルにツベルクリン反応を試みたところ、多数のサルが陽性であることが判明した。陽性ザルのなかには神経生理部門で実験中のサルも含まれていた。地下ケージ室のサルの移動禁止の措置がしかれ、全頭のサルのツベルクリン反応検査がおこなわれた。アカゲザルから他の種類のサルへの感染はなかったが、所内研究・共同利用研究の進捗に少なからぬ影響を与えた。その後殺処分したサルの臓器から結

第1表 昭和46年度サル移動報告

種 名	入 荷		死			亡			実験殺出	産
	購	入 寄 附	検 疫 中 弱	赤	痢	結 核	事 故 死	そ の 他		
スローロリス		3	2							
ヨザル	6	1						1	3	
リスザル	5							2		
タイワンザル	1						1		4	2
アカゲザル	27	16	1	4		21	2	2	24	1
ニホンザル	17						3	4	8	1
ベニガオザル	11		2					1	1	
カニクイザル	14	3							2	2
ブタオザル										1
M. f. f. × M. m										1
ミドリザル								1		
パタスザル		1								
フサオマキザル	1									
シロテナガザル								1		
小 計	82	24	5	4		21	6	12		
合 計		106				48			42	8

核菌が培養され、家畜衛生試験場の根本博士により牛型結核菌と鑑定された。結核事件、後ただちに所員全員の胸部X線撮影が実施されたが、幸いにもサルからの感染を疑う事例はなかった。3カ月後再度所員全員の胸部X線撮影がおこなわれ結果は陰性であった。第2表は研究所に寄附されたサルの種類および寄附者を示す。

昭和44年度サル施設創設以来事務担当として勤務した山口多美子が昭和45年度で退職し、昭和46年4月より笹倉淑子に代った。笹倉淑子は家事の都合で昭和47年2月に退職し同年3月より伴野芳枝が採用された。研究所創立以来、サル類の飼育を担当した宮谷浩（教務職員）が、昭和46年4月本部庶務に転任し、代って同年8月より阿部政光が技官として採用され飼育にあたることになった。また臨床検査を担当していた上村美貴子が、昭和46年10月退職し、同年11月獣医師の資格のある松林伸子が教務職員として採用され、臨床検査の仕事を引継いだ。

第2表 昭和46年度サル寄附者明細

種 名	日本モンキー センター	動物商	その他
スローリス			3
ヨザル		1	
アカゲザル	2	5	9
カニクイザル	1		2
パタスザル	1		
合 計	4	6	14

昭和46年度に実際に使用した総予算とその内訳を第3表に示す。

昭和46年度サル施設本棟・検査舎・第1放飼場・第2放飼場などの建設の予算が認められ着工完成した。第1

第3表

項 目	46年度
人 員	11(1)
予 算	1,550万円
ケージ代	290万円
備品代	371万円
{サル代 {エサ代	345万円
薬品代	80万円
その他	464万円

( ) は併任

放飼場（面積約1,650㎡）、第2放飼場（面積約1,296㎡）は高さ4mのコンクリートの塙で囲まれ、前者はかし、なら、ひのき、松、杉等の樹木がはえている。ここを使用して、研究のプロジェクトの進行が期待されている。検査舎（180㎡約100頭収容可能）、サル施設本棟（420㎡約300頭収容可能）は空調設備が完備している。検査舎の完成により衛生的に厳密な検査の実施が可能となった。サル施設地下1階には空調設備器機、ケージ洗じよう室、1階には10コのケージ室、調理室、手術室、暗室、細菌検査室、調剤室、洗濯室2階には事務室、技術員室、一般検査室、生理検査室、休憩室がおかれている。生理検査室には人工気象室（0℃～40℃可変可能）が設置され、科学的な飼育管理のための環境生理学的検査・研究が行なわれている。一般検査室には、蛍光分光光度計、分光光度計、倒立位相差顕微鏡等が設置され、血液検査・各種ホルモンの測定が可能であり、繁殖生理学的ないし病態生理学的な検査研究が進められている。これらの施設の完成により、多方面の研究の発展および検査、健康管理体制の充実が期待される。なお、新施設等については、巻頭の配置図を参照されたい。

## 研究概要

### 1) リスザルの日周期性活動リズムの研究

登 倉 尋 実

リスザルの日周期性活動リズムがいろいろな明暗条件にどのような影響を受けるかを観察している。

### 2) 夜行性サルの睡眠のポリグラフ的解析

登 倉 尋 実

特殊な生活に適応した夜行性のヨザルの脳内に慢性電極を埋込み、脳波計でポリグラフの観察をおこなっている。

### 3) 雄ザル性能力の変動に関する基礎的研究

松 林 清 明

主としてニンザル、ベニガオザルの雄を用いて、季節的、年令的、社会的な性能力変動を内分泌学・形態学的手段で調べている。

### 4) ベニガオザル雌の正常月経周期について

松 林 清 明

子宮頸管粘液塗抹標本、体温、各種ホルモン等の変動を見ている。

研究発表（1971年4月～1972年3月）

## 論 文

- 1) Thermal and metabolic responses in the Japanese monkey at temperature of 5～38℃  
T. Nakayama, T. Hori, T. Nagasaka, H. Tokura and E. Tadaki

[J. Appl. physiol., 31(3): 332-337 (1971)]

- 2) Surface area in the Japanese monkey (*Macaca fuscata*)

T. Hori, H. Tokura and E. Tadaki

[*J. Appl. Physiol.*, 32(3): 409-411(1972)]

#### 学 会 発 表

- 1) 異常高温環境におけるニホンザルの生理的反応  
只木英子・登倉尋実  
第71回日本獣医学会 (1971)
- 2) 日本ザルの暑熱寒冷環境における生理的反応  
中山昭雄・堀哲 郎・永坂鉄夫  
只木英子・登倉尋実  
第48回日本生理学会総会 (1971)
- 3) 輸入ザルの検疫の経験  
登倉尋実・松林清明  
国際実験動物アジア太平洋会議 (1971)
- 4) ニホンザルの体表面積について  
登倉尋実・只木英子・堀 哲郎  
中山昭雄・岡田守彦・近藤四郎

第16回プリマーテス研究会 (1972)

- 5) マカクサルの寒冷血管反応

岡田守彦・登倉尋実・近藤四郎

第16回プリマーテス研究会 (1972)

- 6) ニホンザルの発熱について

只木英子・中山昭雄・堀 哲郎

永坂鉄夫・登倉尋実・後藤純規

第16回プリマーテス研究会 (1972)

- 7) チンパンジーによる部屋の照明の点滅行動

浅野俊夫・熊崎清則

第16回プリマーテス研究会 (1972)

- 8) ニホンザルの免疫学的妊娠診断について

松 林 清 明

第 6 回日本実験動物研究会 (1971)

- 9) 実験的トキソプラズマ感染豚の病態生理学的所見

石井俊雄・鈴木直義・松林清明他

第71回日本獣医学会 (1971)